

書 評

矢ヶ崎典隆：『食と農のアメリカ地誌』東京学芸大学出版会，2010年8月刊，158p.，1,700円（税別）

本書は、現在日本でもっとも精力的にアメリカ合衆国（以下「アメリカ」と略）を研究している地理学者によって書かれた、アメリカ地誌のテキストである。意外に知られていないことだが、日本語で書かれ手頃な価格で購入できるアメリカ地誌の書籍は極めて少ない。インターネット上の総合目録データベース Webcat で「アメリカ 地誌」と入力すると、一番新しい検索結果は植村（2004）で、その他は数十年前に出版されたものばかりである。評者は過去に複数の大学で「アメリカ地誌」に相当する科目を担当した際、参考図書の一つとして小塩・岸上（2006）を紹介したが、同書は高額で受講者に購入させることが難しかった。つまり、図鑑のような大型本を除くと、単独の地理学者がアメリカに焦点を当てて書いた包括的なテキストは長らく皆無であったのである。このような状況の下で出版された本書は、大きな意義があるといえよう。表題で著者は「食と農の」アメリカ地誌と対象を限定しているものの、実際に扱われている範囲は歴史的な環境変化から文化地理学的内容まで様々である。地理学界におけるアメリカ地域研究の第一人者による本書の刊行を、心から喜びたい。

本書は全部で9章から構成されている。第1章「地理学のアプローチ」では、地理学の立場からアメリカを理解するための具体的な方法として1) 地域的多様性とその形成過程、2) アメリカに内在する等質性の理解、3) アメリカの全体像の理解、4) 広域な地域の枠組みへの理解、の四つを提示する。その上で、アメリカ地誌の課題を検討

する方法として1) 網羅累積法、2) テーマ重視法、3) 地域抽出法、4) 地域区分法の4つを挙げている。本書では主に2) を援用しつつ、検討する内容に応じて3) と4) も組み込みながら平易な記述で筆を進めている。また、著者は現地調査によってミクروسケールな地域を研究する地理学を、他の野外科学と共に「地域研究の下部回路」と位置付ける。その上で、ローカルスケールから見えてくる景観や人々の活動への検討を通してアメリカの食料をめぐる問題を理解することの意義、すなわちフィールドワークの重要性を強調している。

第2章「アメリカ先住民の世界」、第3章「ヨーロッパ農業の導入」、第4章「多様な自然と開拓」では、アメリカ先住民がどのように北アメリカの自然環境を利用しながら生活しており、ヨーロッパ人の入植が先住民の生活とそれまでの自然環境をどのように変貌させたか、またこの過程でヨーロッパ人がどのような困難に直面していったかが丁寧に説明されている。一口に「先住民」といっても、彼らの生活様式は居住する地域の環境によって大きな違いがあり、生計を立てる方法も農耕から狩猟中心の生活まで、地域により様々であった。これは、後から入植してきたヨーロッパ人にとっても同じ事が言える。すなわち、ヨーロッパからの入植者として多大な影響を与えたスペイン人、フランス人、イギリス人は、それぞれが有した目的からアメリカ大陸の異なる地域へ展開し、母国で培った独自の農業形態を持ち込みながら入植をすすめた。彼らはヨーロッパでみてきたものとは全く異なる自然環境に直面しつつ、森林・草原・砂漠など多様な困難を乗り越え開拓を進めた。ここでは丸太の利用、家畜の管理と有刺

鉄線の考案・普及、灌漑の発展など、環境が多様なアメリカならではの読み応えのある話題が続く。これら三章の内容は、アメリカの入植をめぐる歴史地理のみならず、中等教育の世界史でアメリカ史を教える際にも大いに参考になるであろう。なお、先住民の環境利用とヨーロッパ人入植以降の変遷については、環境史研究の先駆者であるウイスコンシン大学の歴史・環境地理学者クロノンの名著 (Cronon, 2003) も併せて勧めたい。

第5章「農業地域」では、アメリカの農業地域がどのような背景のもとで形成されたか、コーンベルトとよばれるトウモロコシ生産地域の形成を事例にわかりやすく書かれている。続く第6章「農業景観」では、アメリカの農場形態の基盤となった土地制度に着目し、最も広範囲に影響を与えたタウンシップ制について詳細に解説している。土地所有や農業形態の違いは、農場の規模の差異にも大きく反映されている。著者はさらに、生産体系や生産規模によって使用する機具や施設が異なる様子が、農業景観の観察から読み取れることを示している。

第7章「家族農場とアグリビジネス」では、建国当時ジェファソンがアメリカの基盤となることを見据えた家族農場の変貌と、近代化による集約的な資本投下で大きな利益を上げるアグリビジネスの登場について説明している。この二つは相反するものとしてとらえられがちであるが、著者は時代とともに両者が密接な関係を持つに至ったこと、そしてアグリビジネスの活動が多様化して実態が見えにくくなっていることを指摘している。日本人にも馴染みがあるオレンジとレタスを事例にした説明に加え、アグリビジネスの多大な影響を受けてきたカリフォルニアの農業発展に関する記述は、著者が長らく研究を続けてきたもので、多くの知見が得られる。反面、アグリビジネスの主導はあまりに強力であるゆえに、近年アメリカで

農業者による直売市場(ファーマーズマーケット)が急速にカリフォルニアから発展していった背景が、ここから垣間見える気がする。

第8章「肉食と食肉産業」では、アメリカの人々の生活における食肉の姿を説明した上で、時代とともに食肉産業の分布と形態がどのように変化してきたかを論じている。多くの日本人にとって昔そうであったように、かつてアメリカでも牛肉は高価で羨望的な食品の象徴であった。消費される肉の中心が豚から牛へ変化したのは、20世紀に入ってからのことである。当時はニューヨークやシカゴなど大消費地に食肉加工業が集中していたが、20世紀後半から次第に内陸部のハイプレーンズへ移動してきた。ここには豊富な地下水資源、半乾燥気候、灌漑農業の普及による穀物供給の増加など、様々な立地上の好条件があったが、大型化したフィードロット(肥育場)の集中とともに増加した食肉加工場の規模は、大都市に立地していた過去のそれをはるかに凌駕するものであった。近年増加傾向にある企業的養豚も含め、ハイプレーンズにおける大規模な畜産業と食肉加工業の進出は、周辺環境や地域社会へ大きな影響を与えている。

第9章「アメリカ農業と世界—まとめと課題—」は本書の総括である。アメリカの農業は時代と共に大きな変化を遂げたが、発達した資本主義と工業的農業によってアメリカで成長したアグリビジネスは、現在ラテンアメリカ大陸を中心とした発展途上国へも、多大な影響をもたらしている。残念ながら、その結果は芳しいものばかりではない。著者は、伝統的な地理学的手法でグローバル化したアメリカの食と農業について研究することの限界を認めつつ、様々な地域における食と農の問題を理解する上で、野外科学として地理学が現実的かつ包括的な理解を提供する力を持つ事を強調し、本書を締めている。

本書の優れた点は二点に集約できよう。一点目は、内容そのものが非常に充実していることである。限られた頁数で食と農に焦点を絞って書かれているとはいえ、国家形成以前から現在に至るまでの環境利用の変遷をめぐるアメリカの歴史地理、先住民からヨーロッパ系移民まで様々な集団がもたらした文化とその伝播など、本書では幅広い話が非常に丁寧に説明されている。幅広い読者にわかりやすい平易な文章である一方、内容自体はとても質が高く、丁寧に読めば深いレベルまで理解することができる。著者の「はじめに」によれば、本書は講義ノートを見ながら書き下ろしたものであるが、現在主流になりつつあるパワーポイントなどを主体とした講義だけでは到底ここまで充実した内容を学ぶ事は難しく、有用なテキストの重要性を再認識させられる。本書がもし英語で書かれていたら、アメリカの大学で本書を用いて講義を行うにあたって也十分活用できたであろう。また、「テキスト」という位置づけを越えても、本書はアメリカに関心のある一般読者をはじめ、隣接する分野でアメリカを専門とする人々にとっても、示唆に富む一冊であることは間違いない。

本書の第二の優れた点は、文献リストが大変充実しているため、本書そのものが初学者にとって有益な情報源となることである。かつて評者が担当した講義では、著者の文献目録(矢ヶ崎, 2005)を必ず紹介していたが、本書の巻末にある参考文献リストはこれをさらに充実させたものであり、利用価値が高いことはいうまでもない。本文中では、これら参考文献の全てに言及しているわけではないが、過去の有名な先行研究や著者自身が積み重ねてきた研究を踏まえつつ、大局的にアメリカの諸相が描かれている。

あえて本書に改善点を求めるとすれば、政治経済的背景への言及が十分でないと思われる箇所が散見される点にあらう。人々の活動と多様な環境

の関係と変遷については記述が充実しているが、連邦議会による様々な法案の施行、州政府独自の政策、様々な集団と利害関係の対立の影響など、複雑な政治経済の側面についても説明すべきと感じられる内容が幾度か見受けられた。このため、さらなる研究関心を抱く読者には、本書を通じて新たに追究していく課題が見出しにくいのではないかと懸念される。

一例を挙げよう。本書第8章で論じられている、食肉産業がシカゴなど大都市からハイプレーンズへ移動し変化した経緯について、本書では灌漑農業やフィードロットの規模拡大の例を挙げつつ、食肉加工場を営むアグリビジネスが合併や買収などを経て垂直統合していく様子が説明されている。しかしこの根底にある、安定的な産業として地域経済に有力な基盤を有していた中西部の食肉産業がどのようにハイプレーンズへ移動したのかについては、全く触れられていない。中西部の大都市から人口密度の低いハイプレーンズへ産業移転が実現した背景には、食肉企業が競争と高コストを理由に、それまで友好的だった熟練労働者や労働組合との関係を絶ち、不法移民労働者を含む多くの安価な労働力に依存した工場操業へ変容したことが挙げられる。本書の参考文献に含まれているシュローサー(2001)は、1970年代末以降にアメリカの食肉産業労働者らが経験した闘争をはじめ、現在の大規模な食肉工場内の高速な生産ライン現場で労働者が低賃金で雇われながら晒される危険、労働者の事故や病気に対する皆無に等しい保障、そして労働者の高い離職率と貧困が食肉加工場の集積する地域の治安悪化につながっている実態などを克明に記している。これらの状況を踏まえて再考すると、様々な課題がみえてくるだろう。すなわち、なぜ現代世界で牛肉やその加工食品が安価で購入できるのだろうか。それらの原料はどこから来ているのか。そして、灌漑農業と

安価な労働力に依存したこの繁栄は、今後どれだけ永続していけるのだろうか。仮に中等教育ではここまで論じる機会がないにしても、これこそが本書が提示する重要な課題ではないだろうか。

内藤 (1994) は地理学が本格的に関わるべき課題として、地球規模で人間社会が抱えるグローバル・イシューの「発生のメカニズムの解明と解決ないしは緩和の方途を模索すること」(p. 42) を挙げている。アメリカが事実上世界で最も影響力を持つ国であることを考慮すると、本書で論じられた内容へのより深く批判的な検討は、まさしく内藤の提言を实践する可能性を秘めている気がする。アグリビジネスが構築した工業的農業で短期間に急速な変貌を遂げたハイブレンズは、そのダイナミックな発展過程ゆえに理解すべき重要な地域であるが、それを無批判にとらえることに若干の危惧を感じてならない。

とはいえ、評者は、上記の指摘が膨大な研究成果を積み重ねてきた著者に対する「ないものねだり」であることを十分承知している。既に述べたように、本書は限られた紙幅を考慮したコンパクトな構成にもかかわらず、テキストと読み物の双方から非常に優れている。そもそも、これほど安価で高い質と充実した内容を兼ね備えた地誌書があるだろうか。地理学でアメリカを扱うテキストが皆無に近かった状況を考えると、本書は地理学を学ぶ学生の必読書となることはもちろんのこと、中等教育の社会科や地理歴史・現代社会でアメリカを扱う学校教員の方々から、アメリカ史や農村社会学などの隣接分野で研究に従事する人々まで、多くの人に広く勧めたい一冊である。最後になるが、著者が今後「農と食の」アメリカ地誌に続いて、「都市とエスニシティ」など、他方面にも着目したアメリカ地誌の続編を出版されることを、評者は陰ながら強く期待したい。

(二村 太郎)

文 献

- 植村善博 (2004) : 『図説ニュージーランド・アメリカ比較地誌』ナカニシヤ出版。
 小塩和人・岸上伸啓編 (2006) : 『朝倉世界地理講座13 アメリカ・カナダ』朝倉書店。
 シュローサー, E. 著, 楡井浩一訳 (2001) : 『ファストフードが世界を食いつくす』草思社。Schlosser, E. (2001) : *Fast Food Nation: The Dark Side of the All-American Meal*. Houghton Mifflin.
 内藤正典 (1994) : 地誌の終焉。法政地理, 22, 32-43。
 矢ヶ崎典隆 (2005) : 日本の地理学研究によるアメリカ研究－文献目録－。東京学芸大学紀要第3部門社会科学, 56, 51-63。
 Cronon, W. (2003) [1983] : *Changes in the Land*. Hill and Wang. 2nd Edition. クロノン, W. 著, 佐野敏行・藤田真理子訳 (1995) : 『変貌する大地：インディアンと植民者の環境史』勁草書房。

山下清海著：『池袋チャイナタウン 都内最大の
新華僑街の実像に迫る』洋泉社，2010年11月刊。
191p., 1,400円(税別)

本書は、改革開放にともなう中国人の移動と定着によって、東京のJR池袋駅北口に形成された新華僑街をめぐる人々の物語である。この新華僑街は、日本の伝統的な三大中華街(横浜中華街、神戸南京町、長崎新地中華街)とは性格を異にするものとして、2003年、著者によって「池袋チャイナタウン」と名づけられた。著者の授業で横浜中華街を見学した中国人留学生の感想が次のように紹介されている。「ここはとてもおもしろい。だって、こんなところは中国のどこにもないです。ところで先生、いまから池袋へ行きませんか。池袋のほうが本物の中華料理を食べられますよ」。

本書の特色は、登場人物が読者に語りかけてくるかのように、池袋チャイナタウンをめぐる新華

僑一人ひとりの来歴や日々の思いが、著者ならではの丹念なインタビューによって生き生きと描かれている点にある。

「第一章 池袋チャイナタウンとは？」では、池袋チャイナタウンにアプローチするための基礎的知識が示される。68万人(2009年末)を超える在日中国人の90%以上は、1980年代後半以降に日本渡航を果たした新華僑によって占められている。新華僑の急速な増加はグローバルな潮流であり、池袋チャイナタウンは、彼らの集住によって形成されるニューチャイナタウンの一端として位置づけられる。巻末に掲載された最新の「池袋チャイナタウンマップ」には、ニューチャイナタウンとしての特徴が色濃く表れている。著者は、池袋駅北口前の中国食品スーパー「知音」(2010年閉店)が、池袋チャイナタウンの牽引力であったとし、知音が開業した1991年は、バブル経済の崩壊ともなって都心の地価が下がり、ビルの空室が増加する時期に当たると指摘する。この結果、池袋駅北口により近接した街区には、食料品店、IT関連店舗、美容・エステ、不動産業をはじめとする新華僑の生活に密着する業種が集積する一方、伝統的な中華街では主役となる飲食店(中国料理店)は、それらの背後に分散的に立地している様子が見て取れる。

「第二章 彼らはなぜ日本にやってきたか」と「第三章 池袋・新華僑起業家列伝」では、日本渡航前の中国での生活、日本渡航の動機と決断、日本渡航後の生活をはじめとする新華僑一人ひとりの来歴をもとに、「老百姓」(一般大衆)としての彼らの素顔が描かれる。そこには、池袋で起業に成功した者もあれば、夢破れて故郷に戻った者もいる。彼らの多くは就学ビザを取得して日本渡航を果たすが、中国人就学生を語るうえで、「眠さ」が重要なキーワードになるという指摘は示唆に富む。たとえば、日本渡航後の彼らは日本語学校と

アルバイトを両立しながら大学進学を目指す、次第にアルバイトが生活の主体となって、慢性的な睡眠不足に見舞われることになる。このことは、新華僑の故郷(僑郷)における新華僑の送出システムと地域変化を調査する過程で、日本渡航経験者(Uターン者)に対するインタビューを重ねることによっていっそう明らかとなる。

「第四章 新華僑の経営スタイルと暮らし」では、ビジネスの場における新華僑の同胞・同業者に対する警戒心と、兼業(多角経営)への飽くなき挑戦が挙げられている。この理由として、新華僑特有の同郷意識(地縁)の欠如と経営の不安定さであると著者は推測している。さらに新華僑を皿洗い世代「旧・新華僑」と、あっさり起業世代の「新・新華僑」(1980年代以降生まれの「八〇后」)に分類し、既にビジネスに対する姿勢や居住地域に世代間の差違が表れているという。とくに「旧・新華僑」の居住エリアの拡大については、事例として取り上げられた川口市の芝園団地の調査に基づいて記されている。ここでは、子どもの教育を通じた新華僑の親密なコミュニティが形成されている反面、教育に対する不安と熱心さが、今や僑郷の社会問題となっている留守児童を生み出す要因となっていることも否めない。

「第五章 東京中華街構想の波紋」では、これまで横のつながりが希薄であった池袋チャイナタウンの新華僑が、東京中華街構想の下に連帯したことをきっかけとして、彼らと池袋の地元商店会との間の軋轢が、両者へのインタビューをもとに詳細に記されている。著者は、このような外国人ニューカマーズの集住と地元住民との社会的軋轢は、日本各地で起こりうる問題であり、対話を重ねることによって乗り越えて行くべき課題であろうと述べる。

本書は、池袋という身近な場所へのまなざしを手がかりに、中国と呼ばれる地域あるいは中国人

と呼ばれる人びとが、いかに多様性に充ちたものであるかを改めて理解する手助けになるであろう。たとえば、近年の中国人富裕層による訪日観光の拡大は、先発隊として日本渡航と定着を果たした老百姓の「眠さ」によって達成されたと想像するのは評者の飛躍であろうか。最後に、本書は幅広い読者層を意識して平易な言葉で綴られているが、著者の絶え間ないフィールドワークの蓄積に基づく成果として、エスニック地理学はもとより、地域研究とはどのような姿勢で臨むべきかについて貴重な示唆を与えてくれる。一読をお薦めしたい。

(松村公明)